

第2章

第9回SWYAA国際大会（フィジー大会）

2015年8月12日～8月16日（公式プログラム）
2015年8月17日～8月19日（オプション・ツアー）



第9回SWYAA国際大会(フィジー大会)

概要

第9回SWYAA国際大会は、フィジーにおいて2015年8月12日から16日の日程で開催された。8月17日から19日までの期間には、ビーチコンバーアイランドリゾートにおいてオプション・ツアーが実施された。

大会の実施に当たって、フィジー「世界青年の船」事

後活動組織は、実行委員会を編成した。実行委員会で定めた役割分担に基づき、実行委員はいくつかの作業班に分かれて、様々な活動における視察先の選定から調整にいたるまで、詳細な日程の準備を行った。

目的

- 1) 参加国や参加回の異なる「世界青年の船」事業の既参加青年が出会う機会を提供し、意見交換を通じて国際ネットワークの強化を図る機会とする
- 2) 既参加青年が訪問国の文化と人々を知る機会とする
- 3) 既参加青年がボランティア活動に参加し、社会貢献活動に参加する機会を提供する
- 4) 世界各国で実施されている事後活動について情報交換をする機会とする
- 5) SWYAA国際大会の開催や参加を通じてSWYAAの活性化を図る

大会詳細

大会名称： 第9回SWYAA国際大会（第20回インターナショナル・リユニオン）

開催日程： 公式プログラム：2015年8月12日～16日

オプション・ツアー：2015年8月17日～19日

主催： 日本青年国際交流機構

フィジー「世界青年の船」事後活動組織

同時開催： 「世界青年の船」事業事後活動協議会

参加費： 公式プログラム 54,900円

オプション・ツアー 30,500円

参加者： 参加者 43名（13か国）+フィジー実行委員8名



参加者全員の集合写真

日程

日付	時間	活動
公式プログラム		
8月12日(水)	終日	到着日
8月13日(木)	09:00 09:40	開会式 - 伝統的な歓迎セレモニー - フィジー政府青年スポーツ省大臣 歓迎挨拶 - 日本政府内閣府代表 挨拶 - 日本青年国際交流機構代表 挨拶 - フィジー事後活動組織会長 感謝の言葉
	09:40 10:15	休憩(モーニング・ティー)
	10:15 12:00	オリエンテーションとアイスブレイキング
	12:00 16:30	事後活動協議会(昼食休憩あり)
	16:30 17:45	ディスカッション - テーマ1 社会起業 - テーマ2 先住民族の文化 - テーマ3 SWYネットワーク
	18:30 21:00	歓迎レセプション
8月14日(金)	09:00	ホテル出発、シンガトカへ移動
	10:00 12:20	課題別視察:シンガトカ大砂丘
	12:30 13:00	ボランティア活動:マングローブ植林
	13:25 14:50	ナサウ・ユース・トレーニング・センター(昼食)
	16:20	ホテル到着後、自由時間、夕食
8月15日(土)	09:00 09:45	ホテル出発、移動
	10:00 12:45	マタフル村訪問
	13:00 14:15	昼食とエンターテイメント
	14:15	村を出発
	14:30 15:15	ラウトカ市内フリータイム
	16:00	ホテル到着後、自由時間、夕食
8月16日(日)	07:30	ホテル出発、デナラウ・マリナーへ
	09:00 17:00	サウスシー島クルーズ、閉会式 - スノーケリング、カヤック、サンゴ礁観察、ビーチバレーボール、 ダイビング、ボディボード
	18:00	プログラム終了
オプション・ツアー		
8月17日(月)	07:30	出発
8月18日(火)		クラウド・ナイン、ファンキー・フィッシュ・リゾート
8月19日(水)	18:00	ビーチコンバーアイランドリゾート発、プログラム終了

活動内容

公式プログラム

8月13日

初日の午前、SWYAA国際大会（SWYAA Global Assembly, 以下 GA）開会に際し、参加者代表がフィジー伝統儀式の「カバ（kava）」による歓迎を受け、続いてフィジー政府青年スポーツ省のライセニア・トゥイトウ大臣による歓迎挨拶が行われた。ライセニア氏は、日本政府とフィジー政府が協力し、GAを開催することに賛辞を述べた。続いて金原明彦内閣府青年国際交流担当室参事官補佐による有村治子大臣のメッセージの代読があり、その中でSWYの歴史と世界中の青年リーダーのネットワークの意義、それに対する期待が述べられた。次に、日本青年国際交流機構高下正晴副会長より挨拶があり、最後にフィジー事後活動組織パトリック・モルガム会長による感謝の言葉があった。その後、アイスブレイキングでは、初対面同士でペアになり自己紹介。15分間、自己紹介した後にペアの相手を全員の前で他己紹介した。



歓迎セレモニー

オリエンテーションとアイスブレイキングに続き、事後活動協議会が行われた。SWYAAの近年の活動内容と活動継続に対する課題のプレゼンテーション及び質疑応答が主な内容であった。最初に、金原明彦内閣府青年国際交流担当室参事官補佐からSWYの現状について説明があった。また、齋藤珠恵SWYAA国際連盟事務局長から、SWYのプログラム内容の変遷についての説明があった。SWYは各国のリーダーを育てる事業であり、海上という逃げられない状況の中、外国参加青年と日本参加青年が生活を共にし、独立したコミュニティーを築いていくものである。事業発足当時は青年親善交流が重要視されていたが、現在はリーダー育成を主としている。また、事後活動としての社会貢献活動を重視する考えから、コース・ディスカッションのテーマも、「青年の社会参加」から「青年の社会貢献」へと変化してきている。リーダーシップと参加青年相互の学び合いを高めるために、SWY18からはPYセミナーとワークショップが導入された。また各国ではSWYAAが事前研修に関

与し、様々な社会貢献活動に事業参加前から取り組んでいる例もある。SWY24からは参加青年全員にリーダーシップ・セミナーを、GLDP/SWY26からはプロジェクトマネジメント・セミナーを、またSWY28からは異文化理解セミナーを実施している。

当地新聞（Fiji Sun及びFiji Times。いずれも8月15日付）には、SWYとGA開催について記事が掲載された。GAの開催は、既参加青年のネットワーク構築のみならず、SWYの認知度向上や主催国と日本との二国間関係強化にも効果があったといえよう。



歓迎レセプション

事後活動報告

10か国の事後活動組織からの活動報告があった。

オーストラリア

「Kiva（キヴァ）http://www.kiva.org/team/ship_for_world_youth/loans」というマイクロレンディング（小規模貸付）プログラムを行っている。38名のチームメンバーが、1179件、約\$35,000のマイクロ・ローンを実施した。

「東京会議2014」を経て、事後活動組織と日本大使館及びオーストラリア政府外務省の日本担当の関係を強化するため、活動を再開している。

SWYオーストラリアのフェイスブックの登録者は80名。メンバーは、SWYの事業広報や参加青年選考のために、2グループに分かれてプレインストーミングや戦略立案を実施し、メンバーの活性化に力を入れている。

2016年度の参加青年が選考された後に、事後活動組織の役員を選出する。

カナダ

「ホームステイ+1」を行っている。国土が広いと、メンバーが定期的に一緒に活動することが非常に難しく、一つの組織として事後活動を目的としてつながることが大きなチャレンジである。

エクアドル

2006年から2008年にかけて、「グローバル・フォート・コンテスト」や日本文化紹介イベントを行った。在エクアドル日本大使館とのつながりを確立し、国内外においてリユニオンを実施。2009年に火傷を負った青年を支援する「ロニー・ヤンタレマ」プロジェクトと、グアヤキルにおいて最初の「日本フェスティバル」を行った。2011年、東日本大震災の復興支援のために寄付を募り、折り鶴を折った。同年には日本のワークショップを開き、本や学用品などの寄付を募った。2014年は「世界青年の船」事業の25周年記念を祝った。キトの日本大使館とは継続して良好な関係を築き、日本文化紹介や他のSWYAAとの連携も行っている。

フィジー

2年に一度、12名の参加青年がSWYに参加し、既参加青年の総数は140名になった。活動的なメンバーは30名前後である。1月18日の「国際SWYデー」には、既参加青年の家でのホームステイや、社会貢献のためのボランティア活動などを行っている。事後活動の例としては植樹があり、2012年にはヌクセレ村に20本の白檀の木を植えた。2012年7月の「幼稚園プロジェクト」では3か所の幼稚園に本やおもちゃなどを寄付した。2013年1月の「サイクロン・イバン」救済プログラムでも食べ物や文房具を寄贈するなどして、学校に通う子供たちを支援した。2014年8月のマングローブ植樹では3000本のマングローブの苗を植えた。

日本

日本青年国際交流機構（IYEO）設立を祝い「30周年プロジェクト」として、IYEO人材マップを作成している。マスコットを決めたり、「HUMANO」という新冊子を発行したり、ビジット東北キャンペーンやチャレンジファンドという活動助成金制度などを実施している。国際的な活動としてはスリランカ教育支援プロジェクト「One More Child Goes To School」を実施している。記念すべき30周年であり、次へのステップの年でもある。

ケニア

125名のメンバーがいる認可団体として活動をしている。アフリカ内での情報交換、医療キャンプのホスト、若いリーダーたちの育成、既参加青年たちによる訪問や「ホームステイ+1」を行っている。

ニュージーランド

167名のメンバーがいる。SWY27に参加し、日本参加青年海外派遣の受入国にも選ばれた。GAのプレイベントとして旅行も企画した。事後活動組織として事業の評

価を行い、相互文化理解、友情、人間的成長、社会への還元、影響、結果、旅行という項目について調べた。

スペイン

主に三つの困難を抱えている。一つ目はボランティアやスポンサーがいないこと。二つ目は年会費の未払い。三つ目はメンバーが世界各国に点在しているということ。これらを「問題」とは言わず、「チャレンジ」として捉え、乗り越えている。一つ目に関しては、フリーイベントにすること。二つ目は寄付を募ること。三つ目は他のSWYAAと関わり、基本的な機能や決定の方法を確立するようにしている。大学に行ってSWYについて宣伝したり、盆踊りやもちつき大会などのお祭りで日本文化を広めたりしてきた。GAへの参加やSWY4の20周年を通して、SWYの精神を持ち続け、他国の既参加青年に会いに行くなど、他のSWYAAと関わっている。

トルコ

27か国から158名が集まったトルコGAでは、社会施設の支援やスポンサー獲得、人の移動、ネットワークなどの面で課題があった。また、現在は活動の継続性や参加、青年・スポーツ省とSWYAAトルコとの協力関係の構築などの課題に直面している。



事後活動協議会（トルコ）

ウルグアイ

SWYには今までに2回参加したことがある。その後は、写真展を開いたり、訪問者の受け入れをしたりしている。またGAに参加した経験を友人と共有している。

アメリカ

過去12回参加していて、148名のメンバーがあり、役員も新しい体制で活動中。日本領事館とのつながりもある。現在の活動としては、SWYAAアメリカの連絡先データを最新のものにするために連絡網を整備している。ソーシャル・メディアなどを通じ、SWYAAのネットワーク強化を図っている。ニュースレターや集まり、ホームステイ、JETプログラムとのつながり、季節のイベント等も実施する。まずは一人でもできる活動から徐々に推進しようとしている。

事後活動報告の後は、希望者で集まってグループ・ディスカッションを行った。テーマは「社会起業」「先住民族文化」「SWYネットワーク」の三つだった。各グループ4名から10名前後に分かれ、意見交換を行った。その後全体でグループでの話し合いをシェアした。



テーマごとにディスカッションをする

8月14日



シンガトカ砂丘に向かう

参加者は、シンガトカ砂丘国立公園を訪問した。同国立公園は、フィジーの首都スバから150kmに位置するフィジーで最初の国立公園で1987年に設立された。約650haの広さで、約545haの日本の鳥取砂丘よりも広い。砂丘であるが、緑豊かで様々な植物や鳥類が生息し、生息する約30種の鳥類のうち8種はフィジー固有種である。

パークレンジャーの同行のもと、約1時間半のウォーキングコースに参加し、森の中を探索したり、丘の上から海を見下ろしたり、海岸を散策したりした。公園の入口付近では、作業員が煉瓦を積み重ね堀を建設中だったが、これは馬や牛といった動物が園内に侵入することを防ぎ、砂丘を守る取組とのことであった。

多くの参加者がイメージしていた砂丘とは随分異なっていたが、参加者は、フィジーの豊かな自然を感じるようになった。

次に、コロトゴ海岸を訪問し、マングローブ植林活動を行った。この海岸でのマングローブ植林活動は日本のNGO団体であるオイスカの技術指導の下で行われている。オイスカのボランティアの方から植林方法などの説明を受けた後、参加青年で約100本のマングローブ苗を植えた。



マングローブを植林する

この地域では海岸に沿ってマングローブが育っており、嵐から海岸を保護し、海洋生態系の多様性保護に役立っているとの説明があった。参加者が植林したマングローブの苗がマングローブ林に成長するまでには約10年かかるという。

近年の地球温暖化等による自然環境の変化が、島国であるフィジーに与える影響は決して小さくなく、環境保護のための取組が積極的になされている印象を受けた。



ナサウ・ユース・トレーニング・センターにて、オイスカの活動説明

マングローブ植林の後、オイスカの事務所のある、ナサウ・ユース・トレーニング・センターを訪問した。カウンターパート機関である青年スポーツ省の担当者より施設、プロジェクトの概要説明があった。

この研修センターは1990年に設立された。中途退学者が生きる力を身に付けるための職業訓練所として、設立からこれまでに約600名を受け入れ、農業、畜産訓練等の機会を提供してきたという。現在、オイスカ・フィジーでは、ユース・トレーニング・センターでの農業研修のほか、学校を訪問し、子供たちへの環境保護啓蒙活動を行う子供の森プロジェクト、マングローブ植林、サンゴ礁保全プロジェクトの三つのプロジェクトを行っている。

施設概要説明の後、同施設にておいしいフィジー料理の昼食会があり、参加者はフィジーの青年と歌ったり、会話をしたりして交流を深めた。当日は、青年スポーツ省のウィリアム・ナイサラ氏、オイスカ・フィジー駐在代表のジョセリン・マトウンハイ氏等、多くの方のサポートをいただいた。

定職に就けない青年も多いというフィジーで、若者の生きる力、将来への可能性を見出す場所として同施設の果たす重要性が感じられた。

8月15日



村訪問にて歓迎を受ける

参加者はフィジー各地に点在する村の一つ、マタワル村を訪問した。バスを降りると村の青年や女性に出迎われ、草と花を編んだリースをかける歓迎を受けた。そのまま広場へ案内され、歓迎の儀式ではフィジーの伝統的な飲み物であるカバが振舞われた。その後、グループに分かれ村での生活について説明を受け、記念樹を植え、ココナツや伝統料理が振舞われた。伝統料理のロボは、穴を掘って底に焼けた石を敷き、その上にバナナやココナツの葉で覆った芋や魚、肉を入れ、その上に土を被せ蒸し焼きにするものだった。一通り村を見学し終わると、伝統衣装を身にまとった村人が歌や踊りを披露してくれた。最後は皆が参加して互いに手を取りながら共に踊り、終始とても楽しい時間を過ごすことができた。



伝統料理の「ロボ」

フィジーの人々が今も自分のルーツとして大切にしている村、その一つを訪問し、本来の彼らの生活の一端を垣間見ることができた。それは決して経済的に裕福な暮らしではないのかもしれないが、彼らが「村」という集落全体で共同生活を送る姿は、かつての日本にも似ているものであった。



村人のパフォーマンス

8月16日

公式プログラムの最終日は日帰りクルーズで離島を訪れた。まずはナンディのホテルからバスでデナラウ・マリナに向かった。バスの中からは、ナンディタウンの様子やヒンドゥー教の寺院も見ることができ、フィジーとインドのつながりを感じることもできた。

そして、マリナからクルーズ船で約30分、驚くほど透明度の高い美しい海と白い砂浜に囲まれたサウスシー島に到着した。着いた直後に、歌と踊りで出迎えられ、SWYでのナショナル・プレゼンテーションが思い出された。離島では、参加者は、カヤック、ダイビング、スノーケルなどのマリンスポーツを楽しんだり、木陰で会話を楽しみながらリラックスしたりと思い思いに過ごした。スノーケルのツアーではサンゴ礁や島の環境の変化についても話を聞くことができた。

昼過ぎには天候が崩れ、雨が降り出した。それに伴う船の遅延もあったが、雨宿りをしながら、あちこちで話に花を咲かすこととなり、SWYにおいて様々な議論が行われた時間が思い出された。

離島を訪れたことで、フィジーのすばらしい自然と、その自然と共存して生きている人々の優しさやホスピタリティに触れることができた。



サウスシー島付近でカヤックをする

8月17日

前日から断続的に降り続く冷たい雨の中、高速船に乗り込んだオプション・ツアー参加者たちは、離島であるビーチコンバーアイランドリゾートへ向かった。宿泊先のビーチコンバーアイランドリゾートは、様々なアクティビティが楽しめるビーチリゾートである。参加者は公式プログラム終了後の、ゆったりと流れる時間をそこで共有した。



バナナの葉で作品を編む

8月18日

雨も上がり、ビーチコンバーアイランドリゾートよりフェリーでクラウド・ナイン（レストラン兼バー）に向かった。参加者は、地元の酒やカクテル・スムージーを飲んだり、窯焼きのピザに舌鼓を打ったりしながら、各々スノーケリングや日光浴などを楽しんだ。潮の流れに乗りながら海を漂ったり、スノーケルで珊瑚礁を見に行ったりするなど、フィジーの自然を全身で感じて子供のように楽しむ参加者が見られ、とても心温まる風景であった。フィジーの海の透明度が高く、参加者は、美しいサンゴ礁ときれいな魚と常夏の太陽を満喫することができた。

夕方、新婚カップルであった参加者が、この島で結婚式を催した。腰蓑姿の戦士が先導して浜辺で行う現地方式の結婚式は幻想的で、ココナツの殻とサンゴのかけらで作られたレッドカーペットが夕陽で照らされ、新郎新婦の幸せな笑顔がシルエットに変わっても感動は続いた。

結婚式の後は、夜通し続くパーティへと移行したが、翌19日が旅の最終日とあって、フェアウェルを兼ねた盛り上がりを見せた。



オプション・ツアーを楽しむ参加者たち

8月19日

出発直前まで、魚に餌をやったりスノーケリングをしたりと、心残りなく島を満喫して帰途についた。

プログラムを通じてフィジーの実行委員たちの懐の深さと包み込むような安心感に満ちた優しさに触れ、改めて大いに感動した今回のGAオプション・ツアーであった。



フィジーの海を楽しむ

第9回SWYAA国際大会（フィジー大会）に参加して

日本青年国際交流機構副会長（第3回「世界青年の船」事業参加）高下 正晴

第9回SWYAA国際大会（フィジー大会）は、8月12日から16日までフィジーで開催されました。どの大陸からも遠いという地理的な制約があったからか、約40名の参加者という、ここ数年のGAと比べれば少人数での開催となりました。しかし、人数が少ない分、みんなという話をするのができ、参加者同士の親密度は高く、フィジーののんびりとした空気と相まって、良い雰囲気の中で行われました。また、各国の事後活動組織の活動報告や、ディスカッションも熱心に行われ、SWYの上での熱い雰囲気も感じることができました。

プログラムには、フィジーらしさを感じられるものが随所に織り込まれており、他所では味わえないものでした。特に印象に残っているのは、昔ながらの生活スタイルを守っている村の訪問です。本当に心のコもった歓迎で、みんな感激していました。料理は、長テーブルいっぱいにはずらりと並べられていました。メインは、魚や野菜を土の中で葉っぱにくるみ蒸し焼きにした「ロヴォ(love)」という料理で、朝の3時から準備してくださったのだそうです。皿を持って進んでいくうちに、右からも左からもこれは美味しいよ、これを取って、と次々に勧められ、あっという間に皿は料理で一杯になりました。どの料理も本当に美味しく、手が込んでいて、まさにフィジーの家庭の味を楽しめた贅沢な時間でした。それから、彼らの歌や踊りもとても印象的でした。身体全体を楽器にしたような豊かな響きと絶妙なハーモニーがすばらしく、自分が事業に参加した24年前にもフィジーやトンガの参加青年が歌うのを聞いて感動したことを思い



村への御礼の品を渡す

出しました。さぞ覚えるのが大変だったろうと聞いてみると、毎日の生活の中で歌うことが多いので、特別に覚えるのは大変ではないよ、とのこと。歌が生活

の中にあるのだなど、そのことにもまた驚きました。あとで聞いたのですが、この村で外国人の訪問を受け入れるのは初めてだったそうで、日除けのための大きな屋根を今回の訪問の受入れのために作り、村一丸となって大変な準備をされてきたとのこと。この村の訪問では、フィジーの暮らしと文化、そしてホスピタリティを実感しました。今回、海外の参加青年の言葉で印象に残ったものがあります。フェアウェルパーティーで「GAを続けるべく努力してもらって、本当に感謝しています。私たちは1年経ったらまたみんなと会えるのを励みに活動しています。」と何人かから握手を求められました。

今回で9回目になるGAですが、とりわけ海外の参加青年にとっては非常に重要なものになっていることを実感しました。SWYにも毎年招へいされるわけではないため参加青年の数がとても少なく、国外に出ている参加青年がほとんどという国もあります。参加青年同士のつながりを維持し、事後活動を続けていくことは、日本で活動している私たちには想像もできないくらい大変です。GAの初日には各国の活動報告を行いました。そういう状況の中ですばらしい活動をしている国がいくつもありました。その報告も、この頑張りをもみんなに知ってもらいたいという熱意の伝わるものでした。そういった思いがあったからこそそのフェアウェルパーティーでの言葉だったのだと思います。世界につながるSWYファミリーの絆を維持するために、このGAは重要な役割があるのだと再認識した、良い機会になりました。



歓迎セレモニーにて(左からフィジー政府青年スポーツ省ライセニア・トゥイトゥボウ大臣、日本青年国際交流機構高下正晴副会長)

第9回SWYAA国際大会（フィジー大会）を終えて

SWYAAフィジー代表 第15回「世界青年の船」事業既参加青年 パトリック・モルガム

フィジー「世界青年の船」事後活動組織（以下、SWYAAフィジー）は2015年8月12日～19日の期間において、内閣府と日本青年国際交流機構より第9回SWYAA国際大会開催の機会を与えて頂いたことを光栄に思う。また、フィジー特有の温かいホスピタリティをもって、世界各国からみなさまをお迎えできたことを大変喜ばしく思う。

この大会はナンディで開催をし、様々な国から43名、フィジーから8名の参加者を迎えた。正式な開会宣言は青年スポーツ省のライセニア・トゥイトゥボウ大臣によって行われた。4日間の公式プログラムは、半日の事後活動協議会、課題別視察、田舎の村の青年たちとの文化交流、最後に一日かけてのサウスシー島のクルーズを含んでいた。期間中、参加者はSWYでの経験を思い出



記念品をもらい嬉しそうな参加者

し、他の回生、現地の青年たちと新たな友情を育んだ。青年交流プログラムの中でも有数のプログラムの同窓会である、この大会に参加することは、事業終了後もお互いのきずなと記憶を保つための一番良い方法であると私たちは考える。参加国から報告された様々なプロジェクトや活動は、各国で開催されている事後活動に大きく貢献をしている。この事業の既参加青年、例えば医者や地域のコーディネーター、会社員として、また民間企業、外交や政府で働いていることを見ると、社会のそれぞれの分野で貢献していることが分かる。

フィジーにおいてこのような大会を運営する機会をいただき、私たちは非常に感謝している。青年スポーツ省、ライセニア・トゥイトゥボウ大臣閣下及び職員の皆さま、日本政府内閣府青年国際交流担当室、金原明彦参事官補佐、在フィジー日本大使館、塚田和夫一等書記官、日本青年国際交流機構、高下正晴副会長、SWYAA国際連盟、齋藤珠恵事務局長、そして特にSWYAAフィジーのメンバーであるフェリペ・ナゲラ氏(SWY11)、ジョー・ファタ氏(SWY19)、プレム・ラタ氏(SWY21)、デビーナ・デビ氏(SWY19)には、参加者の思い出に残る滞在ができるよう力を尽くした、大会開催までの働きに心から感謝の気持ちを伝えたい。

最後に、私たちが努力を継続し、協力していくことを通して、私たちは更なる発展を続け、SWYAA間のより強い関係、友情を育むことができると確信した。

ヴィナカ・ヴァカレヴ。（ありがとうございます）